

アーカイヴからセレクションへ

全日本合唱連盟音楽資料室 LP レコード・デジタルライブラリーの教育的価値

木村 元（書籍編集者、アルテスパブリッシング代表）

全日本合唱センター（現・全日本合唱連盟音楽資料室）が東京・恵比寿に開設されたのは1979年というから、1980年の高校入学と同時にコーラスを始めたわたしの合唱とのかかわりと、そのスタートはほぼ同じということになる。1983年に大学進学で上京すると、取るものも取りあえずセンターを訪れ、はじめて目にする楽譜やLPレコードの膨大な数に驚き立ちすくみながら、合唱世界の奥地へと彷徨いこんでいったことをよくおぼえている。

コンパクトディスク（CD）が開発され、徐々に普及していったのも、ちょうどそのころだ。LPはそのサイズもあいまって、さながら美術品のような佇まいを感じさせ、付属する解説は書籍にも匹敵する知の結晶であったが、コンパクトで音の劣化もないCDは大量かつ長期間の収蔵に適しており、これまで録音されたことのないめずらしい楽曲を収録した盤がつぎつぎにリリースされ、好楽家は自宅に私家版アーカイヴを築くようになった。

世紀が変わるとデジタル音楽配信が普及し、2010年代からは定額制サブスクリプション・サービスが一般化、音楽のアーカイヴの役割を配信プラットフォームが担う時代となる。その流れのなかで、全日本合唱センター資料室のような専門性の高いアーカイヴは、その存在意義が問われるようになった。

センターは1980年代から資料拡充につとめ、一時は3,500～3,600点のLPを収蔵したというが、2013年の築地への移転を機に洋盤1,000点を廃棄、邦盤500点を国立国会図書館に寄贈する方針としスリム化したと聞いている。2019年には1,000点の外国作品レコードを台湾の林俊龍氏に譲渡したが、このとき氏は「合唱連盟が選んだということに価値がある」と言って引き受けたそうだ。

2021年までに、残った1,000点から松原千振・今井邦男両氏が236点を選択。次世代合唱指揮者の柳嶋耕太氏の意見も交えつつ、そのなかからさらに厳選された60枚のレコードが今回デジタル化された。この選定にあたって、松原氏は「展望・熟考・歴史・地域・構想・実践・集中・疑問・評論・疎通・自由」という11の観点をかかっている。CDやサブスクで聴くことのできないレーベルや盤を優先するという事情はあったにせよ、かつては美術品や書籍に比するほど高度に美と知を凝縮したプロダクトであったレコードのもつ多面的な価値を評価するにあたり、氏個人の識見が最大限に発揮されたことは不思議なことではない。

大量収蔵のアーカイヴから個人によるセレクションへ——。台湾の林氏のことばがいみじくも証すように、情報氾濫の現代に芸術文化の価値を担保するのは、オーソリティの“目、であり“耳、である。上京してすぐにセンターを訪れたわたしのような五里霧中の

者の手を引いて、地面の凹凸を足に、木々のありかを手に感じさせ、あとは独力で地図を描き歩いていけるように導いてくれる先達の存在が、こうしたセレクションを真に意味あるものとする。3,500点からじつに236点へと縮減したライブラリーは、すでにして網羅的にも啓蒙的にも普遍的でもないが、そのかわり、すぐれて教育的な価値を強くたたえるものとなったのである。

今後の課題は、残る130点余りの音源のデジタル化。それに加えて、解説ほか付属物をもデータ化し、その姿をできるかぎり後世に残すことだろう。皆川達夫氏、濱田滋郎氏、磯山雅氏など、後年わが国を代表する音楽学者や著述家となる人々が、若かりし修業時代に手がけ、それぞれに知情意をつくして書きあげた珠玉の解説が、いまもこの資料室には眠っている。物として手にとることはできなくても、こうした人々の営為が合唱文化を底上げしていたという事実を伝えつづけることが、このライブラリーに課せられた使命であろう。

©Gen Kimura 2025

|筆者略歴|

木村 元 (きむら げん)

1964年生まれ。上智大学文学部哲学科卒業。1988-2007年、株式会社音楽之友社で音楽書籍の企画・編集に従事。2007年、株式会社アルテスパブリッシングを創業。音楽書を中心に旺盛な出版活動を展開。桜美林大学リベラルアーツ学群非常勤講師。国立音楽大学評議員。著書に『音楽が本になるときー聴くこと・読むこと・語るうこと』『音楽のような本をつくりたいー編集者は何に耳をすましているのか』(以上、木立の文庫)。